

=====

◆◇「犯罪からの子どもの安全」メールマガジン vol.26 ◇◆
2010年10月29日号

=====

このメールマガジンでは、(独)科学技術振興機構 社会技術研究開発センター(以下、RISTEX)「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域が領域の活動報告をはじめ、各種イベント案内、国の取組み、問題に取り組む人々の紹介など、犯罪からの子どもの安全に関する様々な情報を毎月一回程度配信しております。

次回から配信を希望されない方、登録情報を変更したい方は、末尾をご参照下さい。

メルマガについてご意見やご感想、こんな情報が知りたい、こんな取り組みを行っているなど、皆様からの情報をお待ちしています！

◆◆ INDEX ◆◆

1. 研究開発領域・プロジェクトの活動紹介
2. 犯罪からの子どもの安全レポート
 - ・日本心理学会公開シンポジウム「頭の良さについて考える：IQとEI」参加レポート
 - ・平成22年度領域合宿
3. 「犯罪からの子どもの安全」WEBサイト更新情報
 - ・国の取組み情報
 - ・イベント情報
 - ・見どころピックアップ！
4. 「犯罪からの子どもの安全」WEBサイトアクセスランキング
今月一番注目されたコンテンツとは・・・
5. 今月のキーワード
警察の捜査にも「協働」が！？

◆◆◆◆

皆さんこんにちは！

10月に入り、街にはハロウィンの装飾が、山には紅葉の錦が、飲食店には秋の味覚が並び、日を追うごとに秋の気配が濃くなってきました。

毎年この時期に発表されるのが、ノーベル賞。今年はノーベル化学賞を受賞した3名のうち2名が日本人という嬉しい結果でした。業績は、「有機合成におけるパラジウム触媒クロスカップリング」。どういう反応かという、異なる二つの有機化合物の炭素同士をつなぐというもの。

異なるものをつなぐ？どこかで聞いたような響き・・・と考えを巡らせ思い当たったのが、当領域で目指している連携や協働。分野や専門が様々な方が関与しているため、異なるプロジェクト間、研究者と実務者、行政機関と研究機関など様々なパターンの連携がありうる当領域にとって、相通じる部分があるように思えてなりませんでした。

本メールマガジンや領域WEBサイトが皆様と領域と繋ぐ触媒のような役割を担えればと、願っています。

さて、今号のレポートには、「犯罪の被害・加害防止のための対人関係能力育成プログラム開発」プロジェクト実施者が企画・登壇したシンポジウム「頭の良さについて考える：IQとEI」参加レポートを掲載しています。

また、今月中旬に行った領域内の協働を促すための場である領域合宿の開催報告も掲載しています。

それでは、最後までお楽しみください。

1. 研究開発領域・プロジェクトの活動紹介

今月の各プロジェクトの動きをご紹介します。

「被害と加害を防ぐ家庭と少年のサポート・システムの構築」プロジェクトは、11月16日に第2回セミナーを開催する予定です。このセミナーは、以前にメルマガでもご紹介しました、5月に行われた第1回目のセミナーの続編です。第2回となる今回は、医療分野での研究と、地域でのサポート・システム構築に向けた取り組みが主に報告されるそうです。

http://www.anzen-kodomo.jp/pdf/ad_05.pdf

「子どもの被害の測定と防犯活動の実証的基盤の確立」プロジェクトは、10月1日～3日に開催される「日本犯罪社会学会大会第37回大会」で研究発表を行いました。また、12月3日には「子どもの防犯研究・つくば報告会」が開催されます。詳細は、以下のURLをご参照ください。

http://www.anzen-kodomo.jp/pdf/ad_07.pdf

「子どもの見守りによる安全な地域社会の構築 ハート・ルネサンス」プロジェクトの取り組みが、10月15日発行の読売新聞で紹介されました。今年6月に開局したコミュニティFMやGPS機能付き携帯電話を用いた子どもの見守りに関する取り組みが紹介されました。

「犯罪の被害・加害防止のための対人関係能力育成プログラム開発」プロジェクトでは、10月16日に開催された日本心理学会公開シンポジウム「頭の良さについて考える：IQとEI」で小泉代表が講演しました。当日の様子は、参加レポートをご覧ください。

「系統的な『防犯学習教材』研究開発・実践プロジェクト」では、10月16日に地域の方々に協力を頂き、プロジェクトが作成したシステムを活用した研修会を開催しました。外部有識者の方も参加して、地域・行政等さまざまな視点から率直なご意見をたくさん頂きました。

「犯罪から子どもを守る司法面接法の開発と訓練」プロジェクトから、司法面接支援室通信vol.7(2010.10)が発行されました。プロジェクトのホームページでご覧になれます。

<http://child.let.hokudai.ac.jp/doc/?r=53>

ここからは領域活動の紹介です。

まず、CEATEC JAPAN2010（開催期間10月5日～9日）の中で、10月7日に開催されたパネル討論「社会の中の携帯電話」に当領域を担当する安藤が登壇しました。事件報道や子どものケータイ利用実態調査結果、「子どものネット遊び場の危険回避、予防システムの開発」プロジェクトを含む問題への取り組みなどについての基調講演の後、教育現場やケータイ関連の企業を代表するような方々とパネル討論を行いました。

そして、冒頭でも紹介しましたが、中旬には領域合宿を実施しました。領域関係者が全国から集まり、2日間みっちり議論を行いました。どんな議論が飛び出したのか・・・答えはレポートで。

2. 犯罪からの子どもの安全レポート

●日本心理学会公開シンポジウム「頭の良さについて考える：IQとEI」 参加レポート 平成22年10月16日 科学技術館サイエンスホール（東京都千代田区）

人が社会に出て成功するかどうかは、何に左右されるのでしょうか？

本メルマガをご愛読いただいている方には、EI（Emotional Intelligence、情動的知能）という言葉も聞き慣れたものとなっているかもしれません。

心の知能とも呼ばれるEIは、1. 自分の感情や気持ちが表現できる力、2. 他者の感情や気持ちが理解できる力、3. 自分の感情や気持ちをコントロールする力、主にこの3つに整理でき、1が高いと、2、3と高い相関関係を示すといえます。

IQ（知能指数）が遺伝的に決まり、社会的階層化を生み出すというような、“悲観的”な側面があるのに対し、EIこそが社会的な適応性を左右する重要な鍵で、後天的に学習されるものといった、“平等主義的”な考え方もあって、米国を中心に社会的なブームとなったとのこと。

このEIをテーマにした本シンポジウム。興味をひくタイトルもあってか、400名定員にも関わらず、事前申込をしたら数十名のキャンセル待ち。当日参加でも何とかなる！？と会場に足を運び、無事入場することができましたが、関心の高さが伺えます。

今回参加したシンポジウムは、企画者が本領域のプロジェクト「犯罪の被害・加害防止のための対人関係能力育成プログラム開発」のグループリーダーである箱田裕司 九州大学教授らで、代表者である小泉令三 福岡教育大学教授も登壇。

EIはIQと異なる独立した概念か？EIは客観的に測定可能か？EIは訓練できるのか？司会者でもある箱田氏の投げかけに始まり、3名の登壇者が講演、指定討論者・会場からの質疑という流れで進みました。

最初の講演者である遠藤利彦 東京大学准教授からは、IQとEIに関する基礎的な紹介から始まり、EIをめぐる“狂騒”が未だ終わらない中で、実践的な関心が先行し、学術研究が立ち遅れている状況や、EIが新たに問題にするだけの価値を有しているのかといった問題提起などがなされました。

続いての講演者である豊田弘司 奈良教育大学教授からは、EIはどのようにして測定するのか、方法論やその特徴、研究事例紹介がなされました。紹介

された研究事例から見えてくるのは、EIの高い人は、外向性が高く、情緒が安定し、開放性が高い（独創的な知性と関係）というもの。また、学業成績とEIには相関関係も見られるとのこと。EIが高い人は、うまく情動をコントロールでき、良い気分で勉強できると学習がはかどるのではないかということです。また、EIが高いと、孤独感が低いとの結果も。

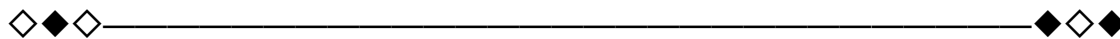
では、そのEIを高めるためにはどうしたらいいのか？次の講演者である小泉氏からは、プロジェクトで取り組む社会性と情動を学習するプログラムと、小・中学校での実践例などが紹介されました。領域の中でも議論になるのが、その学習効果をどう測定するのか、問題行動の被害・加害の予防に寄与するのかを評価することは、大変難しい課題であるということ。プロジェクトを通して、検証とエビデンスの蓄積が進むといいと思いました。

最後に印象的だったのが、遠藤氏が講演の中だけでなく、討論の中でも指摘した、emotional（感情的）なことがいけない、emotionalでないことがいいという方向に研究がいかないか、というものです。色々な感情をまず経験することが重要で、経験をしないと感情の苦さなどもわからない。自分の感情や気持ちをコントロールすることだけを訓練すればいいというものではないということ、改めて気付かされました。

シンポジウム終了後に、小泉氏・箱田氏と少し話をしたところ、今回のシンポジウムを通して、プロジェクトとして参考になる知見を得られたようです。今後の展開を期待したいと思います。

*12月4日（土）13：30より、鹿児島でも開催されます。詳細はこちら↓
<http://www.psych.or.jp/event/index.html>

（領域担当 N.A.）



●平成22年度「犯罪からの子どもの安全」領域合宿レポート
平成22年10月10日～11日 クロスウェーブ東中野（東京都中野区）

10月の3連休の2日間を利用して、平成22年度の領域合宿を実施しました。「合宿」は、このメルマガにもたびたび登場しているので、読者の皆さんの中には、ご存じの方もいらっしゃるかもしれません。そうです、今年も「合宿」の季節がやってきました。

初めて聞くけど、という方のために改めて説明をさせていただきますと、領域合宿とは、研究開発プロジェクトの実施者と領域マネジメントグループが一堂に会して、領域やそれぞれのプロジェクトでの取り組みについて話し合い、意識を共有する場で、これまで1年に1回、実施してきました。4回目となった今回は、総勢約50名と今までで一番の大所帯となりました。

今回はプログラムに少し工夫を施しました。これまでも合宿1日目に必ず行ってきた各プロジェクトによる発表は、ニーズの再確認、プロジェクトで得られる科学的知見、研究開発のプロセスの3点に焦点を当てて発表していただきました。

発表後の質疑では、疑問や問題と感じた部分の指摘はもちろん、似たような取り組みを行っているのでアドバイスが欲しいといったものから、他のプロジェクトで開発しているツールをぜひ自分たちの地域でも使ってみたいといった意見もあり、互いの取り組みをより深く知ろうと熱心に質疑をする参加者の姿勢が印象的でした。

2日目は、グループワークと全体討論を実施。

まず、グループワーク開始前に、石附弘領域アドバイザーに「論点の整理と研究開発の方向性 2年後の領域終了に向け、われわれは何をすべきか」について、話題提供をいただきました。その後、プロジェクト間で連携・補完・助言できることや、今後プロジェクトや領域が発展するための改善点や具体的な取組み、企画をグループに分かれて考えました。

焦点は2つ。1つは、他プロジェクトの科学的手法や知見、成果を「使ってみよう」、あるいは「自分たちのノウハウでもっと良くなる」といった提案を具体的に出す。2つ目は、成果の社会での活用・実装（社会実装）を目指す中で直面した課題に対して、助言や提案を具体的に出すことです。

あるプロジェクトで開発中の技術は、このプロジェクトにも使える・役立つのではないかと、取組みを学びたいので意見交換会の場を持ちたい、人材を派遣してほしいなど、各グループ、それぞれのプロジェクトの特徴を考慮した上で、相関を考えている様子でした。

その他、「社会実装のために必要不可欠な行政の協力をいかにして得るか」「キーパーソンを把握すべし」「各プロジェクトの人脈を活用するようにしたらいいのでは」などは、各グループ共通的に上がっていました。具体的にどうしたらということでは、「各プロジェクトでそれぞれネットワークを拡大している。まずプロジェクト内で育ててきたネットワークについて報告しあうというのも一つの方法ではないか」、「各プロジェクトが行政とのつながりをつくり、それを、プロジェクト間に広げていくことをお願いしたい」などの声が聞かれました。

続いて行われた全体討論では、領域全体の成果創出を念頭に、プロジェクト間連携やアウトリーチの方策など、合宿の全体的なまとめも含めて議論を行いました。ここでコーディネーターを務めていただいたのは、奈良由美子領域アドバイザーです。領域目標の達成に向けて、残り2年間で、いかに取り組むべきか問いかけたところ、たくさんの意見をいただくことができました。

領域ではこれまでも、成果が社会で活用・実装されることを目指し、問題意識や研究開発の途中段階から情報発信をしようと、領域WEBサイトやメールマガジン、都内でのシンポジウム開催などを行ってきました。領域も中間点をすぎ、今後は成果をどうとりまとめ、より多くの問題に取り組む方々に知っていただくかを考えていく必要があります。そのための企画として、現在検討が進んでいるものの中には、地元密着型のイベント、成果をまとめた本の出版などがあります。

これらについては賛否両論のものもあり、実行を前提としているもの、実行の可能性を探っているものなど検討の段階は様々ですが、ターゲットを明確にし、入念な企画をすべき、終了後に残っているものが本だけではだめ、などの意見があり、関与者の視点に立った検討の必要性を改めて実感することとなりました。

また、「いいといわれてプロジェクトに協力してくださったのに、プロジェクトが終了した途端に途絶えてしまったりは、現場の人を裏切ることになる。ビジネスモデルを真剣に考える必要があるのでは」といった終了後を見据えた真剣な声も。

こうして専門や分野が異なる人々が集まり、一緒に作業を進めることは「協働」の一環とも言えます。以外に身近なところで協働を実感することができましたが、それだけで完結せず、今回の合宿で得られた成果や提案、意見については、今後の領域活動にどう反映させていくか、マネジメント

グループとしても真剣に向き合っていきたいと思っています。

(領域担当 S.F.)

3. 「犯罪からの子どもの安全」WEBサイト更新情報

【更新情報】

●国の取組み

平成22年度「青少年の非行・被害防止全国強調月間」の実施結果について
(内閣府)
<http://www8.cao.go.jp/youth/ikusei/h22kekka/index.html>

犯罪被害者等施策 第7回基本計画策定・推進専門委員等会議の開催について
(内閣府)
<http://www8.cao.go.jp/hanzai/sakutei-suisin/index.html>

犯罪死の見逃し防止に資する死因究明制度の在り方に関する研究会
第7回会議議事要旨 (警察庁)
<http://www.npa.go.jp/newlyarrived/?seq=4841>

少年矯正を考える有識者会議 第11回議事概要掲載 (法務省)
<http://www.moj.go.jp/shingi1/shingi06400003.html>

その他の取組みについてはこちら

→ <http://www.anzen-kodomo.jp/ministries/>

●イベント情報

平成22年10月30日～子どもへの暴力防止フォーラム2010
「子どものこえに耳を傾けること
～『子ども被害者学』のススメ～」
<http://www.asahi-welfare.or.jp/info/2010/tokyo/bouryokubousiforum2010.html>

平成22年11月1日 児童虐待防止推進月間 記念シンポジウム
「子どもを守るために必要なこと
- 児童虐待の今とこれからを考える -」
<http://www.kousyou.or.jp/kodomo/content/seminar.html>

平成22年11月16日 「被害と加害を防ぐ家族と少年のサポート・システムの構築」第2回セミナー
http://www.anzen-kodomo.jp/pdf/ad_05.pdf

平成22年11月17日 第17回少年問題シンポジウム
<http://www.syaanken.or.jp/index2.html>

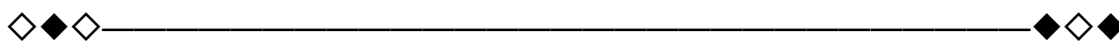
平成22年11月18日～市民安心・安全フェスタ2010 in あつぎ
～夢と夢、人と人を繋ぐセーフコミュニティ～
<http://www.shimin-anzen-gakkai.org/1118chirashi.pdf>

平成22年11月23日 子どもの虐待防止推進全国フォーラムinひろしま
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv42/index.html>

平成22年11月26日～日本子ども虐待防止学会 第16回くまもと大会
<http://www.jaspcan.org/>

平成22年12月3日 「子どもの被害の測定と防犯活動の実証的基盤の確立」
プロジェクト「子どもの防犯研究・つくば報告会」
http://www.anzen-kodomo.jp/pdf/ad_07.pdf

その他のイベントについてはこちら
→ <http://www.anzen-kodomo.jp/event/>



【見どころピックアップ!】

今回の見どころはトピックスから、プロジェクト実施者インタビュー
第10回です。

今回インタビューに応じていただいたのは、「犯罪の被害・加害防止の
ための対人関係能力育成プログラム開発」プロジェクトで研究開発に取り
組んでいる実施者の皆さんです。

こちらのプロジェクトでは、子どもたちが犯罪の被害者にも加害者にも
ならないために、対人関係能力と自尊感情を育成する予防的な教育システ
ムの開発に取り組んでいます。

子どもが犠牲になる事件は途絶えることはありません。そして、小中学校に
おける、暴力行為の発生件数が、過去最高に上った(※)といった気になる
調査結果も出ています。

そんな今、当該プロジェクトの取組みは期待されるところではないで
しょうか。心理学を専門とする実施者の皆さんに開発中のシステムや
プロジェクトの今後について語っていただきました。ぜひご覧ください。

プロジェクト実施者インタビュー 第10回
子どもたちの心を育む学習プログラムが、犯罪や事件から子どもたちを
守ってくれる
→ http://www.anzen-kodomo.jp/pdf/ad_06.pdf

※文部科学省「平成21年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に
関する調査」の結果より。

4. 「犯罪からの子どもの安全」WEBサイトアクセスランキング

【アクセスランキング】

- ☆1位 プロジェクト関与者インタビュー
携帯電話、インターネット問題の怖さを子どもを見守る親の立場から
伝えたい
http://anzen-kodomo.jp/pdf/ad_04.pdf
- 2位 平成21年度研究開発実施報告書
「子どもの見守りによる安全な地域社会の構築 ハート・ルネサンス」

http://anzen-kodomo.jp/reporters/reports/pdf/report2009_ikezaki.pdf

3位 イベント情報

<http://www.anzen-kodomo.jp/event/>

5. 今月のキーワード

「協働」

冒頭やレポート部分でも登場したこの言葉。どうやら警察の捜査にも協働が導入されるらしい。その名も「全国協働捜査方式」。児童ポルノなどインターネット上の違法情報の捜査を効率化するための新たな仕組みのことで、今月1日から試行されたとのこと。インターネットホットラインセンターから通報される違法情報について、まず警視庁が情報の書込み等の発信地に関する捜査を行い、これにより判明した発信地を管轄する都道府県警察が事件の検挙に向けた捜査を行うというのも。来年4月からの本格的な導入を目指しているという。

「犯罪からの子どもの安全メールマガジン」

▼メールマガジンに関する各種変更、配信登録・解除はこちら

<http://www.jst.go.jp/melmaga.html>

▼ご意見・ご感想、お問い合わせはこちら

c-info@anzen-kodomo.jp

■発行日 2010年10月29日

■発行元

(独) 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター

「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域

領域WEBサイト <http://www.anzen-kodomo.jp/>

社会技術研究開発センターWEBサイト <http://www.ristex.jp/>
